

が誇る13台の山車は、朱塗りが基本。旗や提灯（ちょうちん）で豪華に飾られ、祭りの主役を演じる。

松宝丸（陣屋町、海岸町）は北前船をかたどった。その他の12台は2段構造。上段に歴史上の人物の像を乗せ、下段で太鼓をたたく。

山車のサイズは高さ約4メートル、幅約3メートル、長さ約4メートル。松宝丸だけは低くて縦長だが、その分、松をあしらった大きな帆を掲げている。神功（じんぐう）皇后の京人形が乗った神功山（愛宕町）と松宝丸は道文化財に指定されている。

山車と共に奏でられる囃子は京都・祇園の流れをくむ。行進しているときの滑らかな「行き山」神社や各家の前で止まるときの荘厳な「立て山」宿に帰るときのテンポの速い「帰り山」と使い分けられる。

◆宵宮祭

祭り初日の9日は宵宮祭。「魂入れ」の後、子供たちが町内で山車を引き回した。夜、行列の先頭を行く山車が神前で決められた。

◆本祭初日

10日、各町内から山車が姥神大神宮に集合。午後1時ごろ、猿田彦と神輿（みこし）の神社行列を先頭に、上町地区に渡御行列が出発した。昼は子供たちが中心で、笛を吹くのも太鼓を打つのも子供たち。大人はあまり顔を見せない。今年の祭りは、小雨の降るあいにくの天気だったが、子供たちの奏でる荘厳な囃子が古い街並みにマッチして神秘的な雰囲気包まれた。

そして夜。大人の数が一挙に増えて祭り気分がみなぎった。山車を引っ張る男たちは、行く先々の家々に「結構なお祭りだ」とあいさつして、ずかずかと入っていった。家人は嫌な顔一つせず、ごちそうや酒を振る舞いご祝儀を渡した。男たちもどの山車の所属かを

示す名刺を渡し、時にはお礼の切り声を大声で歌った。ご祝儀のよく出る家には長くとどまった。祭りの経費はご祝儀でまかなわれるため、各山車は必死だ。もともと、結局は持ち出しになってしまおうという。

午後7時ごろ、愛宕町の狭い道を電灯をきらめかせて山車が行進。囃子は激しく大きくなった。さらに、午後10時ごろ、大神宮の鳥居前に集合。夜の間も小雨は断続的に降っていたが、祭りのテンションは上がるばかりだった。山車の行進の間に、姥神大神宮で午後9時から神事「宿入れの儀」。町内を練り歩いた3基の神輿が戻った。

たいまつので炎で参道を掃き清め、白い衣の男たちが神輿を担ぎ参道を通って石段を駆け上がった。拝殿に入ろうとするが、一度では神に許されない。1基目は7回目、2基目は5回目、3基目は3回目でやっと納められた。最後の神輿が拝殿に納められた瞬間、息をのんでいた観衆から大きな歓声と拍手が沸き起こった。

◆最終日

11日、山車は下町地区を行進。昼間は前日と変わらないが、夜、祭りは最大のクライマックスを迎えた。

午後9時半ごろ、山車が繁華街の新地町に集合。山車を紹介し「2日間の巡行、ご苦労様です」というアナウンスのたびに歓声が上がった。

照明に輝く13台が通りに並び、それぞれ固有の囃子を奏でる様はまさに壮観。江差の中心街の通りが、山車と観客ですし詰め状態になった。山車の照明とネオンが熱狂する人達の顔も照らし出し、光と歓声と囃子がまちを包み込んだ。

山車を引っ張ってきた若者たちが、最

も熱狂するのが「ばか囃子」だ。若者らは「1銭けれ、1銭けれ。1銭もらって何すんの」と絶叫。太鼓のたたき手は力の限りばちを振る、山車の上に乗る電線から山車を守る「線取り」が棒を床にたたきつけた。若者たちは何かにつかれたように肩を組んで激しく騒ぎ、息をつく間もなく何十分も囃子を続けた。感極まって泣き出してしまおう若い男性の姿もあった。

◆祭りのあと

祭りが終わっても、山車はなかなか動こうとしない。何度も注意され「かえり山」を奏でながら、名残を惜しみ、しぶしぶと引き揚げ宿に山車を戻した。

そのあと、静かに祝宴が開かれた。みんな疲れきっている。何かをやり遂げたような、それでいて寂しげな表情。清正山の頭取・番重守さん（57）は「祭りが終わると寂しくなる。でも明日からはもう、次の祭りが早くこないかと頭の中で考え出してしまっんだ」と笑った。

祭りの数日後にのぞいた祭りのホームページに「姥神大神宮祭まであと360日」と書き込んであった。

Data

日程：8月9日～11日（毎年）

人出：3日間で約7万人

山車：13基



●お問合せ先

江差町観光協会

Tel.01395-2-4815

江差町商工観光課

Tel.01395-2-1020